

杉並郷土歴史会 第350回講演会 平成14年9月21日  
テーマ「民間行事の神事化」 土地開発の波の中における民族のあり方  
講師 真板 道夫氏  
主催 杉並郷土歴史会 会場 セシオン杉並

今日のテーマは「民間行事の神事化」ということで、少し難しい名前を付けましたが、新宿区に落合という所があります、地図で見ると落合は中野区に囲まれています。北の方は豊島区、西と南が中野区になります。新宿区の地図で見るとずっと西に張り出している地域です。その地域に御霊神社が二つあります。一つは中井の御霊神社で、もう一つは葛ヶ谷の御霊神社です。この両御霊神社がお備射祭（おびしゃさい）、備射祭（びしゃまつり）を伝えております。この備射祭の変遷を今日のテーマとしてお話したいと思います。最初の項目として、中井と葛ヶ谷地区の概況について。2番目の項目として、現在の備射祭について。3番目の項目として、過去の備射祭について。4番目の項目として、民間行事の神事化の原因と考察について。最後に今後の備射祭の方向について。このような形でお話したいと思います。

最初に、中井地区の概況ということで郷土史的にお話したいと思います。この中井は、いろいろ調べてみましたが歴史の本には全然名前が出てきません。俗に中井という名前は、「下落合と上落合の間にある所なので中井だろう」と、このような説明がなされていますが歴史的資料はありません。しかし、人々が住み始めたのはかなり古い時代でした。昭和29年に発掘された下落合4丁目遺跡があります。これは御霊神社の近くにある遺跡です。そこから出てきている土器は旧石器時代で、早期、前期、中期、後期からの物が出土しています。それから竪穴住居跡も見つかっており、中期の縄文式土器なども出土しております。それから弥生式土器が、もう一つ別な竪穴住居跡から出土しております。そしてここで出土した土器を復元したものが、目白学園の校内に一つだけ飾られております。そのような古い歴史があります。

それから葛ヶ谷の御霊神社の付近にも、下落合2丁目遺跡というものがあります。こちらの中井と同じように、竪穴住居跡が見つかっています。遺跡がなぜ神社にあるのかよく分からないのですが、おそらく神社の付近ということで遺跡が破壊されずに残ったのではないかと思います。それでこの遺跡を地図で見ると、近くに妙正寺川が流れております。妙正寺から流れ出ているということで唯一、杉並区と深い関係を持っている川の名前なのです。そして、この遺跡の辺りで谷が落ち込んでいます。これを地図の名前で言うと「ばっけ」といいます。要するに「崖」だと思えます。「ばっけ」と言って通用するのは大体60歳から70歳以上でないと、若い人はこの辺に住んでいる人でも通じないのです。そして「ばっけ」という崖の上に住居跡がありました。おそらく崖から清水が流れ出ていたのではないかと思います。そして川の北斜面が崖ですから、

南から太陽を受けて非常に住みやすい崖であったことと思われます。

ここから急に歴史は新しくなり、次に出てくるのは小田原役帳です。正式名称は小田原衆所領役帳といいます。これは小田原に集められた武将と、それに伴った所領の場所と役を書いたものです。永禄2年に編集されました。西暦に直すと1559年です。これは北条氏が一番大変だった年の資料ということになります。この役帳は小田原衆だけではなく玉縄衆、伊豆衆、津久井衆、三浦衆など全部で80衆が記載されており、一番最初が小田原衆だったためにその名前が全体の名前になりました。そのようなことで小田原役帳とか、あるいは北条氏所領役帳と言われています。

そしてこの小田原役帳で、当時の中井地区の領主が分かります。それは太田康資(おおたやすすけ)という人です。太田康資は、これも東京に縁の深い太田道灌(おおたどうかん)のひ孫に当たります。太田道灌は文明9年(1477年)に豊島氏を滅ぼし、この地一帯の主となります。その後、扇谷上杉(おおぎがやつうえすぎ)の勢力が伸びるのを警戒した山内上杉顕定(やまのうちうえすぎあきさだ)の謀略により、1486年に主君・上杉定正の手によって道灌は謀殺されてしまいます。するとその子供は、扇谷上杉の相手方であった山内上杉に付きました。後に山内上杉が、北条に負けそうになりますと北条に付きました。その時期は、この康資の父親の時でした。太田康資の母親は、北条氏と大戦争を行った三浦道寸(みうらどうすん)の娘です。これは司馬遼太郎の「箱根の坂」をお読みになった方はご存じでしょう。太田康資の名前の由来ですが、「資」は太田家に代々伝わる「資」ですが、康資の「康」は北条氏康の「康」ということです。この北条氏康も力が強い武将として有名でした。北条氏康は武田信玄との派閥争いの時に馬を切られて落馬したのですが、歩いて武田信玄に戦いを挑んだと関係文書に書いてあります。この太田康資は、永禄6年に北条氏に背き里見氏に付きます。そして永禄7年に下総国国府台の戦いで里見義弘と共に戦います。この里見義弘も時代の名将だと思いますが、この戦いは当然のことながら北条氏に負けてしまいます。そして追放されてしまいます。このようなことから太田康資は、この小田原役帳のできた4年後に北条氏から離れるわけです。ですから歴史的には、かなり面白い資料であると思います。

それから小田原役帳の中に、「寄子配当分として拾貫五百文、江戸落合、鈴木分、長野、寄子」とあります。ここの中に寄子という記述が出てきます。当時、寄親寄子制度というものがありません。これは足利時代の大名の統治の仕方なのです。寄親とは有力な武将で大名の一族や重臣で、寄子とはその配下となる土豪や地侍です。それまでの鎌倉時代というものは惣領制で、同族結合の軍事力の体制でした。そして室町時代になると、特に「応仁の乱」以降には、有力な武将の下に在地の土豪が集まり擬制的な親子関係を結ばせたのです。ただ寄子とは、公私にわたって寄親の命に絶対に服しましたが、身分上は主君の家臣でありました。そしてこの寄親寄子制度でみると太田康資が有力な武将であり、江戸落合では鈴木という家や、あるいは何人かの家が寄子であることが分かります。そしてこの家が在地の地侍なのです。今でも中野や上落合には鈴

木という姓は多いのです。現在でも西新宿に十二社熊野神社があります。その宮司として熊野から来たのが鈴木家の流れです。また、中野長者と言われる人たちの流れも鈴木なのです。ですからこのころ既に有力だったということが分かります。また、太田道灌が豊島氏を滅ぼした時に、どのような政策をとったかということも分かります。つまり鈴木というのは、もともと豊島氏が熊野の地頭であった時に連れてきたのです。ですから豊島氏に仕えておりました。後に豊島氏が滅ぼされても地侍は残りました。この事はどこの郷土史の本にも書いてないのですが、そのようなことが小田原役帳で分かりました。

それから「寄子配当分として拾貫五百文」と出てきます。この拾貫五百文についてお話したいと思います。これは北条氏の米に対する計算なのです。北条氏の時代には貫高制で表し、江戸時代は石高制で表されました。1貫文というのは粳5石に相当します。さらに江戸時代は玄米で換算しますから、これを精米して玄米換算すると2石5斗になります。この換算率の歩留まりは5割です。このようにすると北条氏の貫高制と、江戸時の石高制の換算率が分かります。そして江戸時代には畑作でも、上々畑、上畑、中畑と格付けされていました。そしてこの畑の格付けは石で表されていました。たとえば上々畑が1石5斗取れる畑で、上畑が1石3斗取れる畑です。そして年貢は石で取られたかということ、そうではなく何貫文という金納制になりました。ですから畑作の場合は金納制で、水田の場合は石で年貢という2本立てなのです。実はこの換算率が北条氏の時代にできたのです。

それからもう一つ、この江戸近郊の統治に当たり、代々の名主の力が大きいのです。この人たちはどこから来たかということ、言い伝えでは、元をたどれば北条氏の家臣であるとされています。ところが北条氏のどこの文献を見ても出てこないのです。おそらくこの人たちは、北条氏の寄子ではないかと思えます。そのようなことから、北条氏の寄子と江戸時代の名主と伝えられている古い家柄との関係をもう少し研究したほうが良いのではないかと思います。

次に「新編武蔵風土記稿」という文政年間の文書を見ると、当時の戸数が分かります。下落合で67戸、葛ヶ谷で40戸ということです。このような小さい村でした。葛ヶ谷の村高は、文政13年の文書で見ると64石となっております。私が住んでいる松庵の旧西高井戸は中高井戸村が前身で、戸数は7戸で江戸近郊ではおそらく一番小さな村だったと思いますが、石高が60石でしたから、葛ヶ谷は1戸当たりの石高が低く相当貧しい所だったと考えられます。

そしてこの村に御霊神社がありました。この御霊神社の名前の伝説が、葛ヶ谷御霊神社に残っております。それは昔、かつて京都からこの地に流された葛野大納言(かどのだいなごん)が都より御霊神社を観請し、深く信じたところ、許されて都に帰されたため、土人がその奇験最も顕著なりと崇敬し、産土神として守り続け、江戸時代に中井へ分祀をしたとあります。そして葛野大納言という人は実在しない人ですが弘文天皇の皇子に葛野王がおり、桂川の近くに葛野という古い地名もあります。ですから葛野という名前は、奈良時代の終わりから平安時代の終わりにかけては、かなりポピュラーな名前だったのではない

かと思えます。神社のいわれに用いるにあたり「葛野大納言」とすればいかにも実在したように思うでしょう、あるいは、葛ヶ谷と近い名前なので誰かが思いついたのではないかと推測しています。

次に葛ヶ谷御霊神社や中井御霊神社の祭神ですが、両御霊神社は祭神から見るとほとんど同じなのです。葛ヶ谷御霊神社の祭神は、仲哀天皇、神功皇后、応神天皇、武内宿禰です。それから中井御霊神社の祭神は、仲哀天皇、応神天皇、神功天皇、仁徳天皇、武甕槌命(たけみかづちのみこと)で、武の神ともいわれます。そしてこの両神社の祭神は八幡神社のそれと同じなのです。特に大宮八幡祭神と同じです。ですから祭神から見るとこの神社は八幡神社系統だと思えます。しかし、京都の御霊神社は、菅原道真、井上内親王、早良親王、そのほか志を得ずして途中で死んだ人たちを祀り、たたり、怨霊、生霊などを鎮める御霊信仰の中心です。ですから、京都の御霊神社はたたりを抑える神様が祀られているのに、ここの両御霊神社は違うのです。それではなぜ御霊神社という名前をつけたのかと、いろいろ調べたのですがよく分からないのです。それと、なぜ同じ地区に同じ名前の神社が二つあるのかもわかりません。あるいは、京都の上御霊神社と下御霊神社があるのを倣っているのかもしれませんが、本当のことは分かりませんが私はそう思います。

両方の御霊神社に、備射祭(びしゃまつり)という祭りが伝わっております。備射の本来の名前は歩射(ぶしゃ)ではないかと思えます。それがなまって、現在の備射になったのではないかと思えます。現在弓を射るお祭りで有名なのが流鏝馬(やぶさめ)です。鎌倉の八幡宮などで、馬に乗り走らせて弓を射るのです。しかし、歩兵が馬に乗らないで弓を射るのもあります。それが歩射です。元来はこちらの方が古いのではないかと思えます。それから後に、神事の中で弓弦を鳴らしたり、刀の抜き身を出したりして、悪魔払をする信仰の行事になるのだと思えます。

その歩射は、もともとは宮中から始まっております。いつから始まったという正式な記録は無いのですが、淳和天皇という54代目の天皇の時に始められたと言われています。9世紀の半ばごろには、宮中で正月の17日に行われていました。明治維新までつづき正月17日に必ず宮中で歩射が行われていました。その風習がいつの日からか、民間に移ったのではないかと思えます。現在でも東京で歩射を行なっている所が3ヶ所あります。それは葛ヶ谷御霊神社と中井御霊神社、そして大田区の六郷神社です。昔はもっと広く行われていたと書物に書いてあります。

ここから2番目の項目として、現在の備射祭についてお話したいと思えます。現在どのようなお祭りがされているかということについて、ビデオを見ていただきたいと思えます。

【ビデオ】 茅葺(かやぶき)の斜面が、かつての農村の面影を伝える中井御霊神社。拝殿内には新宿区指定の有形民俗文化財となっている、江戸時代の備射祭を描いた大絵馬が掲げられています。絵馬は享保年間に奉納されたものを修

復し、文政13年(1830年)に再奉納されたものです。中央の僧侶は、江戸時代に中井御霊神社の別当であった地蔵院の僧侶と思われ、現在とは様式の異なる備射祭の様子が窺える貴重な資料となっています。

新宿区指定の無形民俗文化財となっている備射祭は、かつては江戸近郊の農村で広く行われ、弓を射て悪魔払いをし、その年の豊穰を祈る正月の年中行事として守り伝えられてきたものです。

葛ヶ谷御霊神社で備射祭の準備をおこないます。祭りに使う矢は境内に自生する篠竹(しのたけ)を刈り取って調整します。かつて、当日までの準備はその年の当番である受番が担当しましたが、現在では氏子総代や神官や役員たちが社務所に集まり、弓矢や的などを作ります。矢作りにとりかかります。大矢の長さは、大人の手の握りで15握り、小矢は13握りと決められています。矢は大、中、小と各2本ずつ計6本の矢を作ります。矢羽は御霊神社の印という角印を押した半紙でくくります。矢羽を切り込みに差し込み、赤糸で取り付けます。弓の弦は毎年新調し、麻を撚って作ります。弓は本来、毎年新調しますが桜の若木で作ります。枝の長さが6尺のものをを用いることになっています。

的作りを前に、的に貼る鳥を刷ります。もともとは手書きでしたが、現在は版木を使用しています。馬棟(ばれん)で鳥を刷り上げてゆきます。的の鳥は夫婦和合を表す雌雄2羽の鳥と、鰯が描かれています。的は直径1メートルほどのもので、竹を裂いたものを網代に編み、表面に半紙を貼り付けたものに分木で3重の円を描きます。分木は的を作るための、いわゆるコンパスとして使われるもので、竹を2つに割り、先端に穴を開け、その縁に彫り込みを付けたものです。縁どりした後、墨で塗りつぶして仕上げます。その後、的の中央に鳥を描いた半紙を貼付します。これで祭りの準備が整いました。

毎年1月13日に葛ヶ谷御霊神社では備射祭の日を迎えます。この日、境内では1年間の無病息災を願って「どんど焼き」が行われ、古いお札や正月飾りを焚き、その火で餅を焼いて食べると風邪を引かないと言い伝えられています。社務所では大礼を前に、的の鳥に1夜水につけた白米をすり鉢ですった仕込みを供えます。鳥の的は全国的にも例が少なく、これに瞳を付けるのも極めて珍しいものです。この後、的の鳥を鳥居に取り付けます。

午前10時、祭りの関係者一同は、鳥居下に整列し行列をなして拝殿に向かいます。かつては旧暦の12月1日のどぶろく作りから始まり、祭り当日まで40日余り、全般あげての祭りが行われていました。しかし明治以降に次第に簡略化され、現在では1月13日の午前中に行われます。

拝殿内に達集した関係者は、神殿に向かって左側に送番、右側に受番が互いに向き合って着席し、それぞれの側に役員や氏子が居並びます。

送番と受番の前には折敷きが置かれ、松竹梅の小枝を刺し立て、ごまめを載せた一の膳。二の膳の取肴(とりさかな/とりざかな)の折敷は、丸切りにした鰯、たくわん、輪切りにした大根の煮込み、箸、杯の御酒が載ります。

式次第は、祭典が済むと分木の受け渡しとなります。御霊神社の氏子である西落合1丁目から4丁目までの4組が持ち回りで当番を勤め、去年の当番が送

番、今年の当番が受番を勤めます。受番は拝礼の後、宮司に分木を戻します。

そして分木の受け渡しが終わると、続いて御神酒の儀に移ります。御神酒の儀に、給仕役の雄蝶や雌蝶が出るようになったのは昭和52年からで、それ以前は小学校低学年の男の子の役でした。

お相伴は土地の古老人が勤めます。雄蝶は受番、雌蝶は送番、そして上席の順に神酒を差し上げます。この後は取肴の儀です。その作法には送番の労をねぎらい、受番への引継ぎともてなしの意味が込められています。ここで高砂の謡が歌われます。

御神酒の儀、取肴の儀、謡と続く一連の流れを1セットとし、4回続けて行われます。2回目の取肴の儀は、送番から受番へ、謡の2曲目は四海波(しかいなみ)です。そして3回目の取肴の儀、3曲目は春栄、松風を謡います。4回目の御神酒の儀です。雄蝶や雌蝶は、お相伴に神酒をさしあげ、続いて上席より末席まで全員に差し上げます。終わりに受番や送番に差し上げます。最後の取肴の儀は、受番より送番の順に取肴を行います。締めくくりの謡は千秋楽です。淡々として4回繰り返された儀式が終わります。

次は弓引きの儀となります。送番と受番は、神殿に備えられていた弓矢を神職から授かります。その後、受番と送番は神殿に立ち、弓を右手に矢を左手に持ち、上席の介添えで弓矢を神酒で清めます。その際、弓の上下を足元の神酒に3回浸し、次に矢を同様に神酒に浸けて清めます。お清めが済むと、受番と送番は拝殿入り口に立ち、弓取りの儀に臨みます。受番と送番は、鳥居の的に向かって交互に小矢、大矢、中矢の順で3本ずつ矢を射ます。昔はこの矢を拾うと家が繁盛するといわれ、人々はこぞって矢に殺到したといえます。また備射祭で使った弓弦は、受番の家に保存され妊娠産婦がこれを着用して腹帯に巻けば、安産のお守りになると信じられてきました。

弓引きの儀が済むと、参列者は再び行列を組み、鳥居下に向かいます。昔は式の後、村役人や花婿などを胴上げし、拍手喝さいしておのこの帰宅したといえます。

晴々とした顔が並び、記念撮影で葛ヶ谷御霊神社の備射祭は、めでたく終了します。

中井御霊神社の備射祭は、1月13日の午後に行われます。祭事の弓は、昔は桜の木を使っていました。現在ではえごの木で作ります。神殿に松竹梅、分木、お魚が供えられ、後は祭りを待つばかりです。午後2時、祭り開始の太鼓を合図に、古式に則った祭礼が始まります。宮司、年男、神社総代が列をなして拝殿に向かいます。的は葛ヶ谷の物より一回り大きく、中央に鳥2羽が向かい合って羽を広げている姿が描かれています。拝殿では祭典が始まりました。祭典の後、弓射(きゅうしゃ)の式が行われます。拝殿の板の間に、神殿より弓矢と湯桶が下げられます。次に大根を台に松竹梅を刺し、鯛を盛り合わせた三具、《しゃこう》の分木、大根で作った男根3本に、水引を掛けたお魚が並べられます。

弓神事は、頭屋(とうや)と呼ばれる年男が勤め、弓、矢の順に甘酒で清めま



す。弓矢の清めが済むと、年男二人が拝殿内に乗り、一礼した後、鬼門に向かって矢を射ます。引き続いて的に矢を放ちます。豊作と子孫繁栄を願う神事が続き、最後に分神が矢を射て、射治めをします。

弓射の式の後、拝殿では祝宴が行われます。参列者の前に膳が出され、杯事となります。膳には鯛、たくわん、ごまめ、甘酒と、榎の木の箸が載ります。中井御霊神社には、かつて1月11日に「女びしゃ」、13日に「男びしゃ」がありました。大根のオタカラは、子宝に恵まれるようにとの意味で、「女びしゃ」で行われていたものの名残で、参列者一同はこれを捧げ持って拝みます。次に参列者の一人が、謡の鶴亀を謡います。最後は手締めで式典を終えます。

春を招く弓矢の伝統行事として、江戸時代の末まで各地で行われてきたのが備射祭です。現在23区では、新宿区の無形民俗文化財の指定を受けた、西落合の葛ヶ谷御陵神社、中井御霊神社の2ヶ所と、大田区の六郷神社のみになったといわれています。新都心新宿に程近い落合には、かつて豊かな農村地帯であった名残を留める貴重な祭りが、地域の人々の手で大切に受け継がれています。

### 【ビデオ終了】

これが現在の備射祭です。中井と葛ヶ谷の備射祭では、弓引きというところは似ていますが現在はかなり違っていています。それでどのように違うかと言いますと、まず太鼓です。太鼓をたたくというのは、いかにも神社らしいものですが、葛ヶ谷にはありません。中井には太鼓があります。祭事にしても、初めに関係者が一列になり拝殿に向かい、葛ヶ谷では鳶の頭が先に立って列を作ります。それに対し中井では宮司が1番前に立ちます。葛ヶ谷御霊神社は、かなり様式化されていると思います。格好だけの儀式になっているのです。弓引きの儀を見ても、葛ヶ谷では祭事の最後に行いそして解散するのに対し、中井では祭事の初めに行い矢を射終わり祝宴をします。そして祭りの見物人にも一杯ずつ甘酒を振る舞うのです。ですから、関係の無い人たちも祭りに参加し祝うという形になっております。このように中井と葛ヶ谷では、現在の備射祭は違っていています。しかし昔は同じようなもので、その神事を取り入れる時にいろいろな工夫があり、時代と共に違っていったのではないかと思います。

次に祭りが行われた日ですが、昔は両神社では違っているのです。「新編武蔵野風土記稿」では、中井の備射祭を9月と書いてあります。「豊多摩郡誌」では、2月の10日と書いてあります。さらに昭和7年に編集された「落合町誌」には、2月10日とあります。ところが先程のビデオでは2月13日になっていています。おそらくこれは、後に葛ヶ谷に合わせたのではないかと思います。

次に受番と送番の当番の分け方ですが、氏子を4組に分けて行います。西落合の場合は1丁目から4丁目が順番に受け持ちます。それに対し中井では、昔の集落の名前をつけたものが残っているのです。それを参考に4組に分けて受け持つのです。現在はどこにもそのような記録は無いのですが、中井には残っ

ています。

それから中井の御霊神社は、最近まで茅葺（かやぶき）屋根でした。ですが、これはもう見られません。平成12年に銅で全体を囲みました。それで宮司に聞くと、鳥が巣を作る材料に茅を持っていってしまうのです。この茅葺屋根は、昭和の初めごろに補修したことがあるそうです。当時、若者が荒川の河川敷に生えていた茅を刈り、そして皆で屋根を葺(ふ)いたそうです。しかし現在では荒川の河川敷もグランドになり茅がありません。そして茅を葺く技術も人もいないのです。そのようなことで屋根を銅で覆ったそうです。大変に残念なことだと思います。

葛ヶ谷と中井の両御霊神社は、かなり対抗関係にあります。ですからお祭りに関してあまり仲が良くありません。そして神社の縁起も「葛ヶ谷から中井に分社した」と書いた記録があります。しかし、備射祭で使う分木を見るといろいろ分かることがあります。中井の分木には永禄6年(1563年)の漆銘が入っています。現在もまだ使われているのです。依然として、16世紀の半ばのものが21世紀になってもまだ使われているのです。これには私も感動しました。そしてこの分木には、元和6年に葛ヶ谷に古い分木を分けたと書かれてあります。このことから16世紀半ばごろには、このお祭り自体はどのような形であったか分かりませんが、両方の神社で行われていたことになります。

ほかに葛ヶ谷に伝わる話があります。その話をします、永禄8年に分木を預かっている岩崎という家がありました。その家が火事になりました。そして大変に困ったということで、中井に頼んで分木を分けてもらいました。このような話が伝わっております。こうなると葛ヶ谷御霊神社は、江戸時代になってからお宮を分社したのだという話も根拠がなくなります。両神社はライバル関係にありますが、このような助け合いもあるのです。

それから両御霊神社で特徴的なことでは「どんど焼き」です。これは正月の15日に行われるのが普通ですが、こちら両神社では13日に行われます。最近では周りがうるさくなり、「どんど焼き」ができなくなったといわれます。でも、畑でこっそり行っていると聞いております。おそらく周りでも、お祭りということで大目に見てくれているのだらうと思います。

それから、このビデオの制作に関して一つお話したいことがあります。このビデオは教育委員会が作ったものです。ですからわざと抜かしている神事があるのです。それは両神社において、まず神事を行います。修祓、祝詞言上、玉串の奉奠、この順で行われる神事は全部カットされています。

ここから3番目の項目として、過去の備射祭についてお話したいと思えます。

ここに明治時代の備射祭の様子を残した資料があります。これは小野田幸太郎という人が84歳の誕生日を記念して、日露戦争のころの話を昭和51年に書き残したものです。その記録を見ると、祭りの単位は4組で11軒ありました。そして下準備として白酒を作りました。白酒というのはどぶろくです。とにかく祭りというものは、昔も今も同じでアルコールが口の中に入ればよい人たちが多



いのです。そして昔の村祭では、どぶろくというのは自分たちで作るものでした。それから当時の日本では、新暦の正月というのはあまり受け容れられず、1ヶ月遅れの旧暦の正月を祝っていました。そして新暦正月のころに牛込で麴を買ってきます。それから麴1枚について、炊いた米が3合か4合を冷やし混ぜ、1ヶ月以上寝かせます。そしてこの資料では100枚買って来たとありますから、大体4斗分買って来たことになります。そして旧暦の正月七草過ぎに、石臼で挽いて醸造し御神酒とします。現在でも、中井にはお米を使って甘酒をつくりませんがどぶろくに似ているためでしょう、これを御神酒に使います。しかし、葛ヶ谷では清酒になっています。

宴会は、これはお宮で行わないで頭屋とよばれる当番の家で行いました。里芋の小芋を茹でてお椀に高く盛り、それをお客様に出します。お客は組以外の者です。里芋を使うのは人によりさまざまに解釈されています。米が取れない所では芋を代わりに使うと言う人や、畑作中心の所は芋が最初で後から米が入ってきたのだ、という人など解釈がさまざまです。要するに何かおめでたい事がある時は、ねばる物を食べるということが日本人の習慣にありました。特に昔は、葛ヶ谷や中井の土地では水田が乏しいということで、おそらく里芋などを多く食べていたのではないかと思います。このことは民俗学的に興味があるところです。

そしてお祭りの時に、前年1年間に葛ヶ谷に来た嫁は、その時の晴れ着を着て角隠しを付けました。それは葛ヶ谷に来た嫁が、集落の一員となるための通過儀礼としてあるものです。そしてオタカラというものを一人ずつ引き出物として出したそうです。これは男性のシンボルの形に大根を切り、これを奉書紙に包んで水引を掛けた物です。この葛ヶ谷辺りでは、大根は畑の作物として大切な作物でした。ですから子孫繁栄という意味で、このようなことが行われたのだと思います。大根は細工がしやすいということもあるかもしれません。中井御霊神社の宮司に、このような風習はいつまであったかと聞きくと、戦争中は無くなっていたということです。おそらく戦争中は淫らな物は禁止されていたので、この時期に大根をただ切った物になったのだと思います。

そしてこの祭りに使う箸は、中井ではカツの木で作った箸が膳に出されました。この意味は分かりませんが、昔からカツの木というのは縁起がいいということで、縁起物として載せているのではないかと思います。または戦争で物資不足というところから、カツの木の箸を使ったという気もします。葛ヶ谷ではカツの木の箸は使わないということです。

かつては宵宮という前夜祭がありました。若い者が頭屋に集まり、どぶろくを飲んで夜中騒いでいました。この時に謡を謡ったと言います。

祭りの当日には、頭屋の家から白酒を4斗樽に入れて、太鼓をたたきながら神社に向かいました。そして式の時に前の当番から今年の当番に分木を渡し、その時に村中の男の名前を紙に書いて結び付けて渡します。そして式の後に、どぶろくを皆に飲ませました。そして式が終わると、次の当番の家まで太鼓をたたきながら送ります。そして次の頭屋の家に着くと、主、客があべこべにな

り、送って行った人が客になりもてなしを受けます。そしてまた宴会をして盛り上がります。それで祭りは終わりと書かれています。祭りの時に、江戸時代、中井御霊神社に残る絵馬にもあるように弓を引いたのですが、小野田幸太郎さんは何も記していません。

この両神社は、元来安産の神様なのです。神事で使う矢は拾った人が持ち帰るのですが、弓弦は射った人が持ち帰ります。そして妊婦の方に安産のお守りとして腹帯に巻き込んでもらいます。そして無事に子供が生まれると、弓弦を神社に返しお礼としてお米を差し上げます。そのお礼を「オブッショ」と言います。そのような記録が残っております。そしてその返された弓弦は神社が管理することになります。神社は、安産の祈禱をしてからお守りを分けたのですが、安産を願って腹帯を分けました。この腹帯は白色と赤色があり、白色なら男の子、赤色なら女の子が生まれたということです。いただく時には包んでありますから色が分からないので、開けてみるときは皆ドキドキしたでしょう。安産の神様については、文政13年に奉納された絵馬に記録されています。ですから、そのころから有名であったことが分かります。

次に、今まで話してきましたように、いろいろな民間行事であったものが、のちに神事に取り入れられてきました。その中に「女びしゃ」があります。「女びしゃ」は中井の行事でしたが、正月11日に氏子の女性が神社に集まり、特に新嫁を中心に祝宴を開き安産と村内安全を祈願したものです。その際、新嫁はオタカラを奉納する習慣がありました。オタカラというのは、大根で作った男根3本と水引を掛けたものです。そのような習慣が昭和の初めまでありました。先程のビデオでは正月の11日に「女びしゃ」があり、13日に「男びしゃ」があるといいました。しかし実際に調べると10日に「男びしゃ」、11日に「女びしゃ」をしたのではないかと思います。そしていつのまにか13日になり、もともと葛ヶ谷では13日でしたから、こちらに統合されたのではないかと思います。次に「女びしゃ」といいますが、弓引きはしません。中身は女正月です。女正月は一般に正月の15日に行われました。俳句で読まれるときにも15日です。恐らくこちらの地域では、11日に行われたと思います。正月の11日は一般には鏡開きの日です。15日に女たちは正月行事から解放されるということで、集まり女の宴会をやりました。

それに対して男の方は、備射祭当日の13日に「力石」と「どんど」を行いました。力石とは力比べです。何貫という大きな石を持ち上げます。これは葛ヶ谷の御霊神社に残っています。奉納何貫と書かれた石で、新宿区の有形文化財になっております。「どんど」では、子供が集まり餅を焼いたりしました。ですから若い衆が弓を引いたり、「力石」による力比べ、「どんど」などは、村をあげての正月のお祭りだったのです。それが都市化するにしたがって集落の機能は衰えてゆき、昔あった集落の行事が神事に取り入れられていきました。このようなことが私の考えであります。

ここから4番目の項目として、民間行事の神事化の原因と考察ということで、どのように落合が変わって行ったかということをお話したいと思います。

まず交通手段の整備としては、明治39年(1906年)に東中野駅、明治42年(1909年)高田馬場駅、そして大正13年(1924年)椎名町駅、昭和2年(1927年)西武線下落合駅がそれぞれ開設されました。

次に、戸数と人口の変化を時代別に見ることにします。まず明治37、8年の日露戦争を境にして、それまで大体300戸程度でしたが、日露戦争後には倍の戸数に増えております。これは戦争の後で、軽工業などの工場の進出があったためです。今でも神田川沿いには、工場や工場跡が残っております。

それから宅地開発が始まるのは、大正6年(1917年)以降ですが、愛隣園という、今で言えば中小企業なのですが、目白駅の近く3,000坪に貸家を作りました。それが開発のきっかけのようなものです。そして大々的に始まったのは、4年後の大正10年(1921年)、東京府住宅協会の府営住宅が販売を開始したことから始まりました。その場所は今の中落合3丁目で、山手通りと目白通りの交差点からやや西に寄った所で、全部で143戸あったそうです。この時期は第1次世界大戦が終了した後にあたり、日本は大変な不景気に陥っておりました。その反面スペイン風邪の大流行に見られる伝染病等の衛生問題が、全国の主要都市では大きな問題になっておりました。そのようなことがあって、郊外に住むという動きが出たのです。

この動きで忘れてはならないのが、田園都市構想でした。大正8年に都市計画法が定められ、「都市はきちんと整備されなければならない」という考え方が導入されました。その動きに合わせて田園都市構想が浸透するわけです。この「田園都市」はイギリスが発端です。19世紀末のロンドンは産業革命による都市人口の増加で、大気汚染、伝染病の蔓延などで生活環境が悪化していました。その時期、1898年にリネザー・ハワードが田園都市構想を書き下ろしました。その内容というのは、都市規模が人口3万人から5万人で、都市の周りはグリーンベルトや農地で囲み、その中に適当に工場が入っている、これが理想だと発表しました。日本の都市計画に携わる人たちはこの構想に大きな影響を受けました。実際イギリスではこの理論に基づいて、1903年にレッチワースという街がロンドン郊外に建設されました。

しかし、私がロンドンに住んだ町、ウインブルドンも同じ様にグリーンを配置した中に住宅が配置されておりました。これは1890年代に開発された宅地分譲です。おそらくエリネザー・ハワードが考える以前に、同じような考え方があったのではないかと思います。

日本の田園都市といえ、東京では砧、成城学園、特に田園調布です。1918年(大正7年)に渋沢栄一が田園都市株式会社を設立し、田園調布をつくりました。町と地域都心とを結ぶために、鉄道を独自で敷設しました。

この田園調布を開発した以前にも、計画的に土地開発を進めようという考えがありました。1900年に近衛篤磨(近衛文磨の父)が、下落合の自分の屋敷を解放して1万7千坪の土地を開発し分譲したものです。今の目白駅の西側です。1区画は200坪から300坪の大きい区画で分譲し、道路や下水道も整備しました。そしてこの地域は、戦前まで近衛町と呼ばれ、(現在でも古くからの住

民はそう言っていますが)当時の豊多摩郡の中では一番早く下水道が設置されたところです。今も目白通りを南の方に入ると、道路の真ん中に櫨の大木があります。これは昔、近衛家の庭に植えられた櫨の木です。道路を造る時に、切ってしまうのは惜しいということでそのまま残っております。

目白文化村があります。これは堤康次郎が設立した箱根土地株式会社が中心になって造った住宅団地です。この堤康次郎という人は、この事業の前に軽井沢の沓掛に別荘地(現在は千ヶ滝という)を開発していました。そこの別荘地は、最低でも1,000坪という単位で売り出していたのです。すると、それが大当たりしたのです。そしてそのお金を持って下落合の事業にとりかかるわけです。それではなぜ下落合に来たかということ、親戚に小野田耕作という箱根土地株式会社の社員がいました。この小野田耕作は、先程の葛ヶ谷の小田野家や、新宿区長の小野田隆や、中井の目白学園の近くの小野田空左衛門という名主などと、遠い一族なのです。そしてこの小野田耕作と、もう一人の宇田川という地主と協力して、二人で土地開発をしたわけです。そしてこの目白文化村は、1区画が100坪から145坪で、地下埋設の電気、ガス、水道、下水設備が整備され、共用地としてクラブハウス、テニスコート、相撲場を備えた堂々たるものでした。そして住んでいる人たちは、官僚、大学の教授、芸術家、事業経営者、技術者と多岐にわたります。当時として有名な人を上げるならば阿部能成、内田百閒、文化勲章受賞者の小平邦彦や、安部官房副長官の祖父で当時の内務大臣の安部源基など、インテリジェンスが非常に高い人たちが住んでおり、多様な洋風住宅が建てられました。

また目白文化村のような土地開発のほかに、これは計画されて造られたものではないのですが落合文士村があります。これは落合町の神田川沿いにできた、貧しい作家たちのコミュニティでありました。とくに左翼系の人たちが多く住んでいたことで有名です。名前をあげますと宮本百合子、村山知義、中野重治といったような、プロレタリア文学系の人たちが多く川の近くに住んでいました。そして作家の林芙美子も最初は川の近くに住んでいたのですが、その後は少し上の方に住みました。そしてその居住跡は現在記念館として残されています。それから忘れていけないのが佐伯祐三です。この人は洋画家でキュビズムを紹介した人です。佐伯祐三が一躍有名になったのは、大正15年に第13回二科展で二科賞を受けて画壇の注目を集めました。そもそも二科展には1点か2点しか出せませんが、パリの土産として持ち帰った作品19点を特別出品したところ、全部二科賞をもらったのです。そのようなことで日本に衝撃的な影響を与えた人です。翌年の昭和2年にまたフランスに渡り、昭和3年に亡くなりました。未亡人になった米子夫人は昭和47年まで落合に住んでいました。現在の新宿区立佐伯公園は、佐伯祐三が住んでいた跡地を整備した所で、アトリ工部分が残っております。それから洋画家の中村彝とか、鶴田五郎などが落合に住んでいました。大正の終わりにかけて人口が急増してきています。

御霊神社はどう変わってきたかといいますと、神社には宮司は住んでいませんでした。先程のビデオにもあるように、江戸時代に、備射祭の時などは別当

のお坊さんが来て手を合わせるというように、神社がお寺の管理下にありました。日常は管理する人がいないのです。だから安産のお守りなどを出す時は、下落合氷川神社の宮司が6のつく6日、16日とか26日に来て、ご祈祷してお守りを出したのです。この氷川神社は、昔から宮司さんがいました。それでは、御霊神社はどうだったかと言いますと、頭屋が管理に当たりました。氏子が回り持ちで頭屋を行い、おそらくお備射祭りを終えて祭りの道具の受け渡しが行われたのだと思います。送り番、受け番という名に名残りが残っています。このように神社は、村人のものであったのです。

ここで少し脱線しますが、お寺と神社について考えてみたいと思います。神社は、祖先の霊を守る、土地の神様を祀る、商売の神様を祀ると言われています。しかし日本の信仰というのは、それだけでは割り切れないものです。国家や地方全体の安全や繁栄を守ってくれる存在が、どうしても必要ではなかったかと思えます。ここに仏教が出てくるのだと思います。

もともと律令国家の時代には、仏教が国家を支えるという考え方がありました。そしてこの考えは飛鳥時代にもありました。例えば、聖徳太子などは仏教を深く信仰し、四天王寺や法隆寺を建て仏教奨励策をとり、飛鳥地方に優れた仏教文化が栄えたのです。それは仏教を以て国を治めるという考え方で、国の安全、地域の安全というものはお寺が守るという思想がありました。

奈良時代には聖武天皇が国家を鎮護し五穀豊穡を祈り、全国に国分寺を設置しました。そして総国分寺が大仏様のある東大寺なのです。東大寺は国家のために神々や諸仏の加護により国を繁栄させるために祈るという役割がありました。奈良時代の律令を支えた思想の根底には仏教による国家鎮護がありました。奈良時代の終わりごろになると、お寺はだんだん私物化されてゆきます。藤原氏が勢力を伸ばすために神社の乗っ取りをしたのも、そのような理由があるかもしれません。また、持仏と言いまして自分用の仏様や観音様が作られました。要するに仏様というものは、国家安寧のためだけでなく、個の救いのためにも必要なのです。このような考え方が出てきました。

平安時代になりますと、仏教信仰の私化はさらに進み、加持祈祷が中心になってゆきます。つまり何よりも自分の病気が治ればよいというように自己のみの救いを求めるようになります。最初、仏教は国家国民全体を救うものでしたが、個人を救うものになってゆきました。

江戸時代になると檀家制度が導入され、お寺により村民の管理や統制をしようという動きが出てきます。そして寺請制度が作られ、生没年、結婚、離婚、移住、旅行、奉公人の出入りなどが記された宗旨人別帳が作られました。

それに対して神社には、荘園、領主が崇めている神を祀ったものと、名主や地侍などが、土地の神様を祀ったものに大別できます。とは言え、荘園、領主、名主ともども一つの神を祀る場合もあり、双方が守っている神もあるし、それぞれが別に神社を持っている場合もあります。いずれにしても室町時代の中期になると、だんだん名主と地侍の結合体を中心になります。その地結合を宮座と言います、共同運営です。上下関係はありません。神社を守ってきた力

は、もちろん領主の庇護もありますが、この葛ヶ谷や中井の例で見ますと、むしろ宮座的な同一で横並びの人たちがお宮を守ってきたのではないかと思います。

平成5年頃、中井の宮司に話を聞いたのですが、そのころ備射祭に参加できるのは中井に古くから住む35戸だけだと言いました。つまり、移住者はあの弓を引くことはできないのです。そのようなお話でした。先月、また話を聞いてみたら、「今はもうだめです。ほかの方に入ってもらわないと」と言っていました。それでもやはり35戸の団結はかなり強いようです。ですから謡にしても、中井のように古くからしっかり伝える風習が残っているところは謡もしっかり謡えるのです。しかし葛ヶ谷では、謡なのか御詠歌なのか何を歌っているのか分かりません。そして葛ヶ谷では、三日前に集まり練習するというのです。昔は謡を謡える人がいましたが、その人が歳を取り謡えなくなると、どのように謡ってよいのか分からなくなったそうです。そのように葛ヶ谷では伝統が崩れてきています。それからビデオで見た雄蝶、雌蝶は昔からあるものではなく、戦後から行われているのです。ですから葛ヶ谷では、実質よりも形式の方が大切のように思えます。

このように民間行事が神事に入りますが、中井には古くからこの民間行事がそのまま神事の中に残っているのがお分かりだと思います。それでは、なぜ中井では伝統が守られているのか、その理由は宮司の存在にあるのではないかと思います。「豊多摩郡誌」を見ると、葛ヶ谷の御霊神社では大正の初めには宮司がおりました。中井の御霊神社は、昭和7年当時まだ宮司はいなかったのです。何か用がある時には氷川神社の宮司が来ていました。このため「女びしゃ」が昭和初期まで伝えられ、雨乞いも大正12年まで行われたのでしょう。ところが昭和12年のシナ事変勃発の頃には宮司がいたようです。鳥居をバックに撮った出征兵士の写真に当時の宮司が写っております。おそらく、戦争が神社の役割を変えたのではないかと思います。かつては、神社が村人を守れば済みましたが、出征兵士を送るにあたり武運長久を祈るという国家的な役割を担わされるとなると、誰かが常駐しなければならないのです。土地開発が進み村が町になる前までは、雨乞いの儀式がお宮で行われたということは、やはり主導権が村人にあったからだだと思います。そして神事の機能というものが、村人の生活に定着しているところが、伝統を守ることができた大きな理由ではないかと思います。それが徐々に宮司の方に移ってゆきます。そして宮司を置けば神社の神事は形式化していくのです。そして戦争はその形式化を進めてしまう一つの要素になったかもしれません。戦争が激化し若い人たちが出征し、村の行事を守ることができなくなったのでしょう。

最後に、神社との新しい関係というものを考えたいと思います。昔の神社は子供たちの遊び場であり、若者や人々が集う所でした。ところが今の神社は宮司が管理しています。そして子供たちが遊ぶと、ボールなどがお参りの人にぶつかって危ないと言うのです。このようなことで神社と地域との関係はだんだん薄くなってしまっている感じがします。神社をもう一度、地域の中に返



すべきです。元に返せば地域の中で存在していけると思います。そして子供たちや若者をどのように参加させていくかを、神社ではなく地域の人々が中心となって考えることにより、もう一度備射祭を中心とした、新しい住民の関係が生まれてくるのではないかと思います。

雑駁な話となって恐縮ですがこれで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【司会】 先生ありがとうございました。この後、皆様方からご質問を受けさせていただきます。

【質問】 先生から頂いた資料の地図ですが、この両神社の位置が入れ替わっているのではないかと思います。私は17、8年前に、何度かこの神社に写真を撮りに行ったことがあります。妙正寺川沿いが葛ヶ谷御霊神社で、その北の方に位置するのが中井御霊神社ではないかと思います。

【講師】 いいえ、これは正しいのです。葛ヶ谷という名前は、この地域では葛ヶ谷公園という公園の名前が一つ残っているだけなのですが、その隣にあるのが葛ヶ谷御霊神社です。そして中井駅近くにある、急な坂を上った所が中井御霊神社です。

【質問】 先生のお話の中で御霊神社の由来として、かつて都からこの地に流された葛野大納言が都より御霊神社を勧請し、深く信じたところ、土人がその奇験最も顕著なりと崇敬し、産土神として守り続けたとあります。そして、もともと京都にある上御霊神社と下御霊神社は不運にして亡くなった人の魂を祀る神社です。そのようなことで、こちらの葛ヶ谷や中井の御霊神社にも、そのような魂が祀られているのではないかと思うのですがいかがでしょう。

それから備射祭でお聞きしたいことがあります。この両神社は応神天皇が祀られています。つまり八幡様の祭神ですから、武の神様として祀られているのではないかと思います。そして矢を射るという行為があるわけですから、農村の行事であるのと同時に、武士の神様としての備射祭りではないかと思えます。いかがでしょうか。

【講師】 最初のご質問ですが、これは御霊信仰とは違うのではないかと思います。こちらの両御霊神社は祭神からみると、大宮八幡神社と同じ応神天皇なのです。ですから神様の系列からみると、おそらく八幡神社の系統ではないかと思えます。そして京都の上御霊神社では桓武天皇を祀りますが、それに加えて早良親王、井上内親王、他戸親王、藤原吉子、橘逸勢、文室宮田麻呂、菅原道真、吉備真備などの八つの御霊を崇めました。また下御霊神社では、平城天皇に加えて早良親王、伊予親王、藤原吉子、橘逸勢、文室宮田麻呂、菅原道真、藤原広嗣、吉備真備などの八つの御霊を崇めます。ですから先程もお話したように、まさに京都の両御霊神社という所は不遇のうちに亡くなられた方の

霊を祀ります。

それからもう一つは、武士の神様としてのお祭りで矢を射る行為があると言われますが、今日話した備射祭で射るのは烏なのです。畑作物に悪さをする烏を射る、と神社の備射祭の案内書には説明されております。しかし、私の考えとしては神話から来ているのではないかと思います。そして二つのことが考えられます。まず一つは、太陽には三本足の烏がいます。そして烏に見立てられた太陽を射ることで、太陽の運行を正し豊作を祈願するものだったと思われる。そしてもう一つは、今日の話の中に「葛野」が出てきましたが、葛野郡の県主(あがたぬし)は八咫烏(やたのからす)の子孫であると言われております。その烏かもしれません。ですがその辺は、はっきりしません。それでも新宿区で出している資料には、「畑を荒らす烏を射る」と書いてあります。

【司会】 現在、奈良で調査されているキトラ古墳というものがあります。この古墳の壁画に3本足の烏が出てきます。ですから先生が話された烏と関係があるかもしれません。それから朝廷などでも、天皇が着ている服に烏とかヒキガエルが描かれています。キトラ古墳などはこれからも調査が進みますので、是非皆さんも関心を持ってご覧になっていただきたいと思います。

もっとお話しをお聞きしたいのですが、あとは個人的にお聞きいただくということで、ちょうど時間となりましたので、ここで終わらせていただきます。

最後に、先生に拍手でお礼をしたいと思います。ありがとうございました。